

# 成果報告書

記入日 2014年 10月 01日

氏名 櫻田 智恵	渡航先国名 タイ王国	所属機関 チュラーロンコーン大学 文学部
研究テーマ： 「身近な国王」へむけたパフォーマンス ータイ国王プーミポンによる地方行幸と国民意識形成の関係性ー		
研究期間： 2012 年 9 月 ~ 2014 年 8 月		
研究成果（概要） 現タイ国王プーミポンによる地方行幸は、国民が国王を「見る」ことによる国民意識の創出を目的として開始され、宮中組織の主導のもと国民統合に最も効果的な場を演出・提供してきた。行幸回数が減少した後は、「行幸する国王」がマス・メディア等で再生産され続けることで、国王は国民意識の確固たる象徴となった。		
研究成果（詳細） 報告者は、スカラシップ申請時より研究内容を大幅に変更した。そこで本報告書ではまず、研究内容の変更理由について説明し、その後本研究の内容について記述する。 <b>【研究（調査）内容・所属先の変更理由】</b> 当初、報告者はタイ東北地方南部に居住するクメール民族に関する調査をし、特に使用言語の変化という観点から、タイの国民統合について研究を行う予定であった。しかし、留学開始前に行った予備調査で、使用言語のみに着目することの限界と、先行研究は主に研究対象年代を 1950 年代までとしてきたが、実際にはそれ以降に国民意識が強まったであろうことがわかってきた。 タイには国民統合の基盤とされる「民族（祖国）・国王・宗教」を三本柱とする「タイ的原理」という概念がある。「特に国王は、タイ人の熱狂的とも言える支持と崇拝を受け、確固たる国民統合の象徴となっているように見える [野津 2005]」。こうした国王崇拝の意識は、サリット体制（1957～63 年）以降に推し進められた [タック 1989]。当時、周辺諸国が共産国化する中、国民統合は火急の課題であり、政府は国王の求心力を高めることでこの課題を克服しようとした。つまり、現代タイにおける国民統合は ①国王を中心として ②1957 年に本格化した。それにも関わらず、国民統合に関する先行研究ではこの点への目配りが十分でない。 そこで報告者は、クメール民族のみに焦点を絞るのではなく、広くタイ全体を対象として国王の影響に関する研究をまずは行う必要があると考え、貴財団に承諾を得た上で研究課題を変更することとした。これに伴い、調査地を国王に関する資料や関連省庁の多い首都バンコクに、所属先をチュラーロンコーン大学に変更した。同大学を選んだのは王族・王室関連省庁の関係者が多いからである。なお、本研究において「国王」は、1946 年に即位した現国王プーミポンを指している。 現在のタイ社会はクーデタや王位継承問題などで大きく動揺しており、それに伴い国王を象徴とする「タイ国民意識」にも変化の兆しが見られる。研究対象を国王に変更することで、タイにおける国民統合の歴史を明らかにできるだけでなく、昨今のタイ政治・社会への理解を助け、今後の動向を見極めるためにも重要な知見を提示できると考え、研究テーマを変更した。 <b>【引用文献】</b> タック・チャルムティアロン. 1989. 『タイー独裁的温情主義の政治』玉田芳史訳, 勁草書房; 東京. 野津隆志. 2005. 『国民の形成——タイ東北小学校における国民文化形成のエスノグラフィー』. 明石書店; 東京.		

## 【本研究、及び調査の概要】

本研究は、プーミポン現国王による地方行幸の戦略とその受容に焦点をあて、国民に敬愛される「国王像」が創出される過程を社会文化史的観点から明らかにすることを目的としている。最終的には、創出された「国王像」が市井の人々の国民意識形成に与えた影響について考察を行う。

プーミポン国王はタイの歴史上最も頻繁に地方を行幸した国王であると言われている [NIO 2008]。地方行幸を通して生み出された国王に関する数々の言説は、学校教育やマス・メディアを通して繰り返し語られ、国民統合の強力なシンボルとなっている。報告者は2年間の長期調査において、①宮中組織による行幸の立案過程とその戦略、②奉迎に際する地方側の動き、③「行幸する国王」の宣伝内容・方法の3点を明らかにすべく、刊行・未刊行資料の収集やインタビューなどを中心に行ってきた。また、本格的な調査に入る前に、語学学校と大学の授業に参加した。以下、学校での活動、及び①～③の調査内容と成果について記述する。

## 【留学活動・調査内容】

### ◆語学学校でのタイ語習得、及びチュラーロンコーン大学での授業参加

渡航後最初の5ヶ月は、タイ語の語学学校に入学し、特に論文の読み書きに必要な文語的表現について学んだ。これに平行して、大学での授業に参加し、主に近代以降の歴史に関する授業や、歴史認識、王制に関して議論を行う授業に参加した。議論を行ううち、国王を取り巻く組織形態について新たな気づきがあった。タイにおいて王制について議論する際、枢密院議長など数人のキーパーソンについて言及されることはあっても、国王をサポートする組織全体、特に国王と密接に関係する枢密院、国王官房、宮内事務所の3機関（以後、宮中組織）については等閑視されているという点である。これは国王のイニシアティブが大きく、国王の背後にある組織について意識が向かないためだと考えられるが、国王のイニシアティブが大きくなるのは1973年の政変以降である。先行研究は、それ以前の国王の活動については特に着目しておらず、宮中組織の役割分担についても曖昧な状態であった。そこで、当初は地方の奉迎方法に関する調査を中心に行う予定であったのを、宮中組織の構成や役割分担、地方行幸計画段階の働きなどについて調査することとした。

### ◆①宮中組織による行幸の立案過程とその戦略

主に、バンコク公文書館、国王官房資料室における資料調査と、関連省庁職員へのインタビューを行った。

60年代のタイにおいて、地方には国王を「知らない」人々が多く存在した。役人が正装を着用すると偉く見え、国王の顔を知らない人々が礼をとる相手を間違えるという事態が生じたため、随行する地方役人は服装が華美にならぬよう指導された。こうした事態を克服しようと、一度に多くの人に国王を見せて国王の存在を周知させるため、多くの人を一か所に集め、そこを国王が訪れるというスタイルに絞った。さらに、効果的な奉迎方法の演出を目指し、旗の掲示方法や万歳を唱えるタイミングなどについて、関連省庁を交えた行幸戦略会議と、地方役人への奉迎指導が繰り返行われた。こうした奉迎指導は宮中組織が直接行うのではなく、中央と地方の橋渡しという観点から内務省の管轄で行われ、宮中組織が内務省を指導し、内務省が各地方の行政官を指導し、最終チェックを宮中組織が行うという形態をとった。そのため、当時は行幸を実施するまでに煩雑な書類のやり取りがあり、指示が末端まで行き届かないことが間々あった。そこで70年に全国一律の奉迎方法を定めた。書類の手続きが簡略化されたこと、地方役人が奉迎に慣れてきたこともあり、行幸の回数を増やすことが可能になった影響で、地方行幸は70年代に最も盛んに行われた。

宮内事務所と国王官房とは、職員の採用形態から全く異なっており、力関係が複雑であり、現段階では結論を導き出すことはできない。両者の関係について、さらに資料を読み込んで考察を深めたいと考えている。

## ◆②奉迎に際する地方側の動き

地方行幸は、離宮のある県を中心に行われ、地方の奉迎方法に関する資料は、離宮のある県に集中している。今回は、特に行幸回数が多く、プーミポン国王が行幸を開始した当時から盛んに行幸したチェンマイ県公文書館、チェンマイ大学図書館資料室にて文献調査を、県庁で奉迎業務担当者にインタビューを行った。

宮内事務所の行幸計画担当官によれば、各県に奉迎を専門とする役人がいる。しかし、チェンマイ県の奉迎業務担当者によれば、北部タイで奉迎業務を長く行っているのはチェンマイ県の役人だけで、他県への行幸がある際には、助言のために呼ばれることもあるという。この人物は引き継ぎを意識して奉迎方法に関する手引書を作成しているが、この手引書によれば、行幸の予算は地方が負担することが多い。国王に随行する人数に関わらず毎回一律の金額しか国からは支給されないため、予算の不足は知事が懇意にしている会社などに援助を依頼している。それでも足りない場合がほとんどで、知事のポケットマネーによって奉迎費用を賄っているという事情がある。これらの情報から、内務省の役人がチェンマイ県知事として赴任することは出世街道に乗った証だとされている理由は、奉迎の際の貢献度も影響しているのではないかという新たな仮説を立てるに至った。地方行幸と政治との関係について、大変興味深いデータであると考ええる。

ただ、チェンマイ県公文書館での調査の直前に発生したクーデタにより、国王関連資料を外国人が大量に複写することを問題視されたため、資料を持ち帰ることができなかった。現在、チェンマイ大学の学生に資料の複写を依頼しており、年内には資料が揃う予定である。こちらも含めて検討したい。

## ◆③「行幸する国王」の宣伝内容・方法

80年代に入ると、国王自身の体調不良のため地方行幸の回数は減少する。一方、新聞などのマス・メディアでは、「行幸する国王」の宣伝は活発化した。実際の行幸で演出される「国王像」の効果が局地的で多様なのに対し、宣伝される「国王像」は全国的で画一的である。これは、国王の写真使用の規制など、実質的なメディア規制が行われ、宮中組織が宣伝したい「国王像」が、より効果的に伝達されるようになった点が影響している。新聞などで「国王像」が再生産されるようになる80年代は、ちょうど学校教育でも地方行幸をはじめとする国王の公務について大きく取り扱うよう、カリキュラムが変更された時期でもあり、国王を実際に見たことのない地域や世代の人々にも、広く「国王像」が浸透したと考えられる。収集してきた大量の全国紙と雑誌、及び地方紙との報道内容の比較は今後引き続き行う予定である。

### 【総括、及び今後の課題】

本調査は、当該期の公文書や新聞・書籍文字資料の収集、及び宮中組織関係者との人脈作りとインタビューを主な目的として行った。未だに揃わない資料もあり、調査が「完了」し、「成功」したとはいえないものの、先行研究が脚光をあててこなかった宮中組織に着目し、その組織形態を明らかにし、また宮中組織と国王が「国王像」を創出する過程に関する資料を多く収集することができたと感じている。また、行幸開始直後は、宮中組織も国民の声に敏感であり、行幸目的地や奉迎に関する直訴状や新聞の投稿欄などに見られる国民の意見を如何に取り入れるかに腐心してきた様子がわかってきたのは、大変興味深い事実である。

さらに、資料を集めるうち、行幸が本格化する以前には王妃のメディア露出が多く、地方での活動も王妃の家系が行っていたことが明らかになってきた。従来の研究では「国王」一人に関心が集中してきたが、王妃や皇太子・王女たちの影響力についても十分に考慮した研究が不可欠であると考えられるようになった。これは先行研究上でも、自身の問題関心上でも、調査中に得ることができた新しい視点である。この点については、今後の課題として、さらなる調査を重ね、研究成果として積極的に発表していきたい。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

### ◆ 留学の感想

有意義な留学になったと言える。ただ、そう思えるのは最後の2か月の成果のためである。

調査地であるバンコクには丸2年滞在したが、最初の1年はとにかく研究がうまくいかなかった。うまくいっていないので研究内容を的確に説明できず、さらに焦って研究がうまくいかない、という悪循環に陥っていた。ちょうど当時の政権が動揺していた（その後クーデタ）頃で、インタビューが中止なったり、それまでは閲覧できた資料が突然閲覧できなくなったりもした。焦燥感からか体調を崩して下痢が続き、最終的にアパートの前で意識を失い倒れるという事態を引き起こした。それでも状況を打破する方法がわからずにいたが、留学1年が終わろうとする頃、何人かの友人から「王室関係省庁に知り合いがいる。あなたは信頼に足りそうだから、紹介してもよい」と言われ、これが突破口となって調査がスムーズに進むようになった。こうした話を持ってきてくれた友人のほとんどは、研究とは全く関係のないところでできた友人で、彼らと食事をしたり遊びに行ったりすることは、焦っていた自分にとって「無駄な」時間にも感じていた。しかし、こうした一見「無駄な」時間が、彼らとの信頼関係を築くには必要だったのだということを実感し、長期調査の重要性を改めて認識した。留学の一番の成果は、多くの大切な友人ができたこと、そこから派生して、調査協力者や幾人かのキーパーソンに出会えたことであると考えている。

一方で、辛かった一年半を支えてくれたのは、所属先であるチュラーロンコーン大学の Villa 先生と、歴史学科の同期や先輩たちであった。先生は月一回の調査・研究計画の提出において、私のつたないタイ語と、研究テーマが定まらない私の話に辛抱強く付き合ってくれた。同期や先輩は、研究が進まない私を心配して資料調査の協力を申し出てくれたり、一緒に食事をしながら、時には見解の相違から揉めながらも、研究談義をしてくれたりした。こうした会話の中から得たインスピレーションは、その多くが現在の研究を形作る柱となっている。彼らには、自らの研究成果を持って恩返しできるよう今後も努力を続ける所存であるが、まずは2015年3月のチュラーロンコーン大学での研究成果報告会にて、留学した2年間の成果をしっかりと報告できるよう、準備したい。

最後に、多くの出会いに恵まれ、結果的に有意義な調査ができたことを、すべての関係者に感謝したい。

### 今後の社会貢献

今回の留学では、多くの人が私の日常生活を支えてくれた。私は今後タイ研究者として、お世話になったタイの人々、ひいてはタイ王国に研究成果が還元できるよう、自らの研究成果をタイ語でも発信していこうと考えている。その手始めとして、チェンマイ大学の先生の編集で発行予定の書籍の原稿を書き始めている。

同時に、タイ語や英語でタイの人々に研究成果を還元するのはもちろん、日本の人々へ向けた成果発信も重要であると考えている。タイはASEANの中心国のひとつであり、東南アジア大陸部の要に位置している。直接投資や貿易などで日本との関係がきわめて綿密であり、実際に多くの日本人が居住している。今回の留学を通して多くのビジネスマンやメディア関係者などと知り合い、彼らの政治や経済、さらには歴史・文化への関心が大変高く、情報を提供する研究者を求めていることがわかってきた。そこから、地域研究者はこれまで、調査対象地域への成果還元と比較的重点を置いてきたが、報告者は「調査対象地域に関心を持つ日本人」への成果還元も積極的に行いたいと考えるに至った。研究者ではない所謂「一般の人々」へ向けて研究成果から話をするのは容易ではないが、そうした活動を通し、タイへの理解を深める助力をしたい。さらには、「院生」の研究活動そのものへの理解を促し、院生の活躍の場を広げる一助になればと考えている。

【写真 1・2】

チュラーロンコーン大王記念日(ワン・ピヤ・マハーラート)という、10月23日の行事にて。この日はチュラーロンコーン大王が崩御した日であり、その遺徳を偲ぶ日として国民の祝日となっている。行事には王族が列席する他、多くの人々が記念像の前で供え物をして祈りをささげる。



【写真 3・4】

反政府デモ行進の様子(左)と、デモ会場の炊き出し場の様子(右)(いずれも、2014年1月撮影)。

報告者の居住する地域周辺では、頻繁にデモ行進があり、クーデタに至るまでの人々の熱気を肌で感じる事ができたことは、大変貴重な経験となった。



【写真 5・6】

同期の修了式(左)と、友人の出家式にて(右・報告者は右から2番目)。

互いの研究や将来、研究者や大学院生を取り巻く状況について正直に語り合える友人が出来たことは、留学の最大の喜びであった。

